

ウトナイ湖におけるオオジシギの秋の渡りについて

大畑孝二¹

はじめに

オオジシギ *Gallinago hardwickii* は、サハリン南部、ソ連邦極東南部の一部で繁殖するが、世界中で繁殖地が、北海道を中心として本州北部の高原や、ほぼ日本北部に限られているとよい鳥類である。本種は北海道では山岳地帯、森林地帯、都市を除く草原性の開けた自然環境に普通に生息している。

冬期は、オーストラリアの南東部やタスマニア島に渡って越冬するが、その分布域は狭く、生息数も15,000~20,000 (Naarding 1983) と推定されている。しかも、越冬地のオーストラリアでは最近その生息数が減少しつつあり、その生息地の保全の必要性が考えられるようになってきている (Naarding 1983)。

オオジシギは繁殖期にはにぎやかなディスプレイ飛翔を行なうが、渡りの時期や越冬期には、主に夜間に活動し、広い干潟などみやすいところに出ることもなく、木や草原など身を隠す場所のあるところに単独あるいは少数の群れでいるために、非常に観察しづらい鳥である。よってバンディングによるカスミ網の捕獲も非常に難しく、1961~1983年の22年間に日本中でバンディングされたのはわずか67羽であった。ただし、回収率は高く、このうち4例がすべてオーストラリア南部で回収された。さらにオーストラリアで放鳥した1羽が北海道で回収されている (山階鳥類研究所 1985)。1984年も日本でのオオジシギのバンディングは5羽だけだったが、その後、1985年20羽、1986年84羽、1987年105羽と大量のバンディングが行なわれた。これはほとんどがウトナイ湖でのものであった。

オオジシギはウトナイ湖に例年4月下旬に渡来し、にぎやかなディスプレイ飛翔を繰り返し繁殖するが、7月中旬には鳴かなくなる。その後はほとんど姿をみることがない。しかし1984年から1987年にかけてウトナイ湖トキサタマップ川河口での三浦二郎氏を中心とするバンディングにより、オオジシギが8月に確認され、この地が秋の渡りの重要な中継地である可能性が高いことが知られてきた。

そこで北海道土木部が進める勇払川の切り替え工事 (勇払川の治水とウトナイ湖の水位確保のために勇払川を切り替えトキサタマップ川に合流させてウトナイ湖に入れる計画) からオオジシギの生息環境を保全することを目的に、1988年にオオジシギの生息調査を行ない、現況把握に努めた。なお、この調査は学術的一般調査ではなく、河川改修という河川事業にともなうオオジシギ保護のためのデータ収集を目的としたものである。

1989年10月16日受理

1. 〒059-13 苫小牧市字植苗150-3 (脚) 日本野鳥の会ウトナイ湖サンクチュアリ

調査地の概要

ウトナイ湖は苫小牧の中心地点より北東11km, 札幌～苫小牧につながる石狩低地帯の南部, 勇払原野の北西端に位置し, 海岸汀線から直線距離で8kmのところにある海跡湖である(北緯42°41', 東経141°42'). 湖の面積は230haで最深点65cm, 平均水深37.8cmと非常に浅い(1984年8月測定). 湖内にはマコモ, ヒシ, フトイなどの水生植物が繁茂

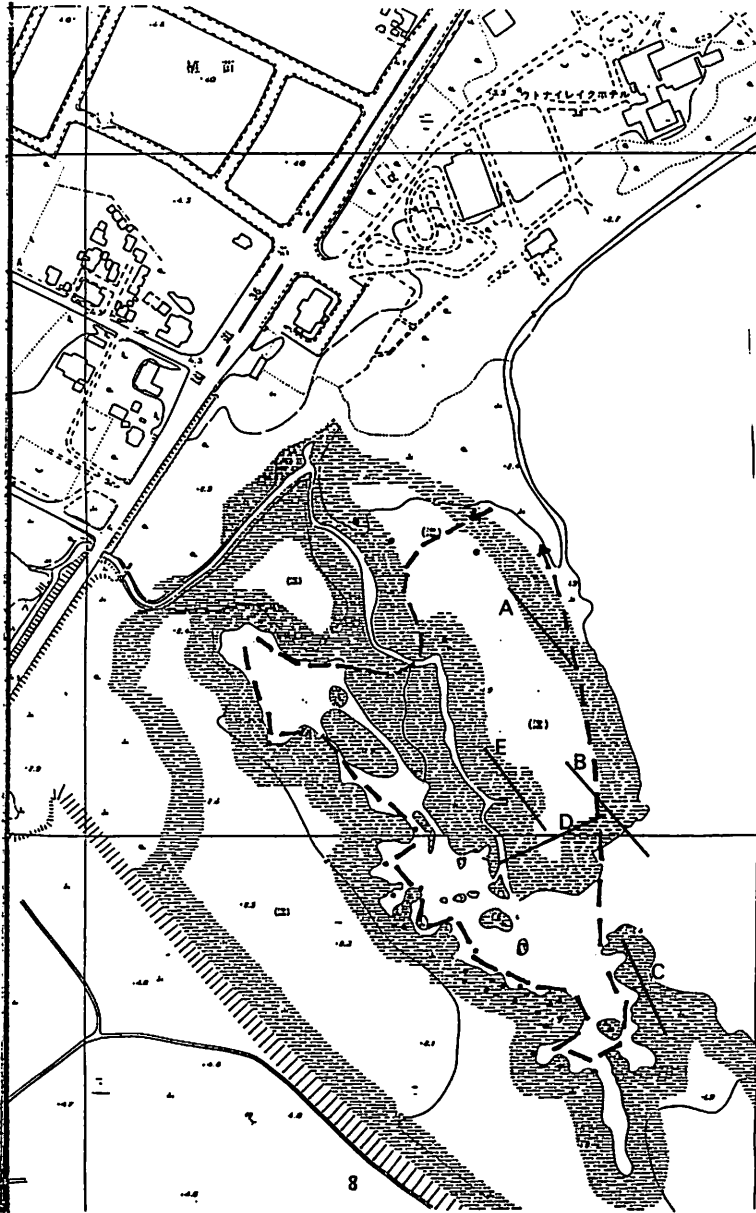


図1. 調査地概要・オオジシギ捕獲網の位置(—)と踏査法(----)によるオオジシギ生息確認地点を示す。

Fig. 1. The study area and banding points. The line census course is shown by a dotted line. Solid circles are the sighting points of *Gallinago hardwickii*.

し、周辺にはヨシ、イワノガリヤス、ムジナスゲなどの草地やハンノキの低木林がひろがっている。ウトナイ湖には、美々川、オタルマップ川、トキサタマップ川の三本が流入している。トキサタマップ川は長さ11.5km、流量0.4~0.5m³/S、流域面積17.6km²の小河川でその河口にある約0.3km²の湿潤地を調査地とした(図1)。

なお、当地は湖及びその周辺510.3haが1981年に日本野鳥の会のサンクチュアリとなり、野生生物の生息地を守るとともに来訪者に対する普及教育の場として機能している。また、同地域は、国設鳥獣保護区特別保護地区に指定されている。

調査期間と方法

調査期間は1988年8月3日より9月10日までの間の19日間であった。調査はバンディングによる捕獲と、踏査により鳴き声からその生息を確認する方法で行なった。捕獲は、61メッシュのカシミ網(12m×3m)を7枚~25枚使い、17時より網をひろげ、19時30分に捕獲回収を行なった。捕獲は8月3、4、5、6、8、10、15、16、17、18、19、20、21、22、23、25、27日、9月8、10日の合計19日間行なった。そのうち8月17、18、19、20、21、22、23日は一晩のうち、2回捕獲作業を行なった。網の設置場所は、図1に示す。8月18日に図1の調査コースを時速2kmで歩き、鳴き声により、その生息を確認し、地図上にあらわした。また、9月19日の夜、踏査によりオオジシギの有無のみの確認をした。なおカシミ網によるオオジシギの捕獲は環境庁長官より鳥獣捕獲許可を得て行なった。

結 果

1 捕獲数及び確認個体数

図2にオオジシギの捕獲数等を示した。今回の調査では133羽と1シーズンとしては、いままでのバンディングで、最大個体のオオジシギが捕獲された。踏査法によるオオジシギ

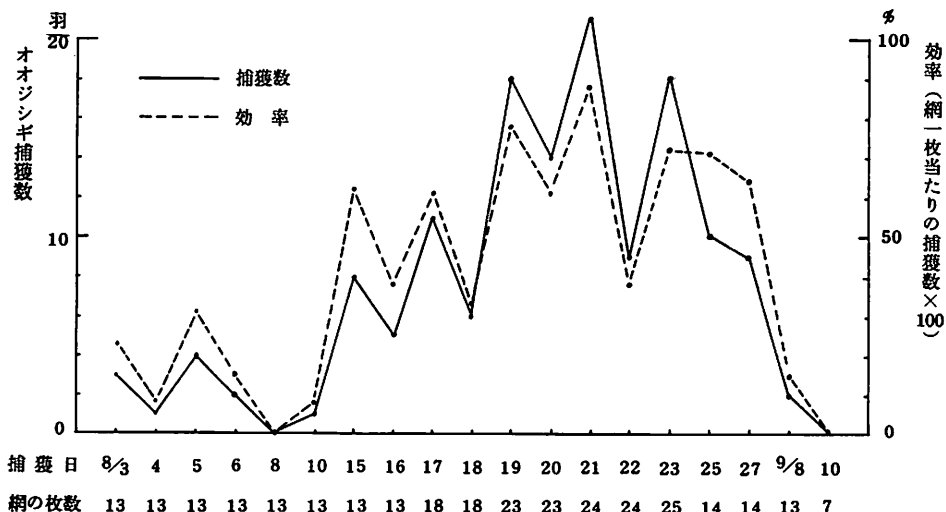


図2. オオジシギの捕獲数と効率.

Fig. 2. The number of *Gallinago hardwickii* captured and the number of birds per net.

ギの鳴き声の確認は夜間における調査であり、若干の地点、個体数のずれが考えられた。オオジシギはかなり近づいてから飛び立つ場合が多く、また、一度飛び立ったオオジシギはかなり上空を飛び、もう一度下りて来るまでにはかなりの時間を要すようだった。よって、二重カウントの可能性は少ないと考えられる。この調査で30羽のオオジシギを確認した。捕獲はオオジシギが自主的な飛行中に網にかかる場合と、調査員による追い出しにより、驚いて飛んで逃げる際に網にかかる場合がある。数量的には把握していないが後者の場合が多いように感じた。よって、かかった網の真下の地面で採食していたとはいえないが、網の高さは2～3mでありそれにかかるものは、そのすぐ近くにいたと推測される。

踏査コースは、水面と湿原の境目とした。これによるとトキサタマップ川河口の湿原の水面と湿原との境目のほぼ全域にオオジシギが生息していることがわかった。

以上、バンディングによる調査および夜間の踏査による調査から、オオジシギは、トキサタマップ川河口の湿潤地のほぼ全域にいることがわかった。

2 生息時期

カスミ網1枚当たりの捕獲数では8月15日が0.62羽とそれまでより急激に増え、8月21日の0.88羽を最高に8月下旬まで続いた。これは渡りによるものと思われる。網での捕獲数は、そのときの網の枚数、勢子(調査員)の数、天候状態、水位の状態などの条件の違いにより容易に変化するので、この数字だけでオオジシギのウトナイ湖での渡りのピークを断定するのはむずかしいが、ほぼ8月中旬～下旬に最も多くのオオジシギがトキサタマップ川河口で採食しウトナイ湖を通過すると推定された。9月19日の調査でも鳴き声を確認したので、その生息がうかがえた。ただし、個体数は非常に少なく(正確な個体数は確認できなかった)、渡りのピークは過ぎているようであった。

考 察

何羽のオオジシギがトキサタマップ地域を通過しているかを把握することは非常に困難であったが、少なくとも、今シーズン捕獲された133羽以上が通過したといえる。これは、北海道内陸部等で繁殖したオオジシギが、オーストラリアへ渡っていく途中、ウトナイ湖のトキサタマップ川河口湿原に立ち寄っていくものと思われる。現在のところこれだけ多数のオオジシギの渡りにおける中継場所はみつかっておらず、日本最大の中継地といえる。

オオジシギの採食場所は、大きくいえばトキサタマップ川河口全域といえる。生息地の水位は大きく変動し、今回の調査期間中も最大205cm、最低174cmと31cmもの変化があった。網場B、Dの平均水深も0cm～16cmの変化があった。オオジシギが泳ぐという観察記録はなく、10cm以上の深い場所では採食できないと思われる。よってトキサタマップ川河口湿原全域が採食場所といっても、水位の変動により、採食生息場所は変化しているであろう。

提 言

今回の調査によりトキサタマップ川河口が重要なオオジシギの中継地となっていることが確認された。オオジシギがなにゆえトキサタマップ川河口湿原に多数飛来するか、明確な理由は、今のところわかっていないが、環形動物貧毛網(たとえばミミズ)、植物、昆虫類等の餌条件、水位の関係、及び植生(身を隠したりする場所として)、渡りのコース

としての地理的關係等が考えられる。オオジシギが生息する環境を人為的に造成できない以上、現環境を維持することがオオジシギの重要な渡りの中継地を保全することになる。よって勇払川の切り替え工事を行なう際に、土砂の流入、植生の変化、水位の変化をおこさない方策を検討し、現環境の維持がはからなければならない。

トキサタマップ川河口は、オオジシギのみに限らず他の多くのシギ・チドリ類の生息地であるとともに、天然記念物であるマガン、ヒシクイの休息地でもある。そして、アオサギの重要な越冬場所（北海道では数か所しか知られていない）でもあり、当地域はウトナイ湖内で最も重要な地域である。このことを十分、認識する必要がある。

謝 辞

バンディング作業では佐藤文男、青山一郎、築田貴司、原田修、奥山博美、鈴木要各氏の他にウトナイ湖サンクチュアリボランティア一同に大変御世話になった。又、ウトナイ湖がオオジシギの秋の渡りの重要なルートであることを発見された三浦二郎氏にはなにかとアドバイスをいただいた。あわせて感謝申し上げる。

なお、オオジシギの調査とともに、植生、昆虫、水生動物、地形、土壌調査（北海道室蘭土木現業所1988）もあわせて行なわれ、その結果、オオジシギ生息地を保全するため、北海道土木部は、勇払川改修計画を一部変更した。

要 約

1. ウトナイ湖トキサタマップ川河口でのバンディングで、8月3日～9月8日に133羽のオオジシギが捕獲された。
2. トキサタマップ川河口湿地を夜間に歩きながらの声によるオオジシギの個体調査で30羽を8月18日に確認した。
3. オオジシギは8月上旬から9月下旬にかけてウトナイ湖を通過して行くことが確認された。8月中旬から下旬に多数のオオジシギが捕獲され、このころが渡りのピークと推定される。
4. ウトナイ湖トキサタマップ川河口湿原約3ha全域にオオジシギが渡りの季節に生息することが確認された。

引用文献

- 大畑孝二・三浦二郎, 1988. オオジシギの捕獲状況と成鳥, 幼鳥の識別について. 日本鳥類標識協会誌 (3) 1: 18-19
- 清棲幸保, 1978. 日本鳥類大図鑑Ⅱ. 講談社, 東京.
- 佐藤文男, 1987. 鳥類観測ステーション報告. pp. 75-80. 山階鳥類研究所.
- Naarding, J. A. 1983. Latham's Snipe *Gallinago hardwickii* in Southern Australia. Wildlife Dir. Tech. Rep. 1983 pp. 1-89.
- 新田和広・藤巻裕蔵, 1985. 繁殖期におけるオオジシギの日周活動の季節変化. 鳥 34: 49-55
- 藤巻裕蔵・赤坂猛, 1987. 北海道におけるオオジシギの生息状況. 鳥獣行政 (85): 23-24
- 北海道室蘭土木現業所, 1988. トキサタマップ川河口におけるオオジシギ生息調査. 勇払川改修工事環境調査報告書. pp. 1-10.

Migration of the Japanese Snipe *Gallinago hardwickii* at Tokisata River, the
mouth of Lake Utonai, Hokkaido

Kozi Ohata¹

1. I banded 133 Japanese Snipes from the 3rd of August to the 8th of November at the mouth of Lake Utonai.
2. Thirty Japanese Snipes were recorded at night on the 18th of August.
3. Apparently most of the snipes migrated between early August and late November at Lake Utonai.
4. The snipes lived all over the 3 ha area at the mouth of Lake Utonai.
 1. Lake Utonai Sanctuary, 150-3 Uenae, Tomakomai, Hokkaido 059-13, Japan.